妖僧記

泉鏡花

一

加賀の国黒壁(くろかべ)は、金沢市の郊外一里程(りてい)の処にあり、魔境を以(もっ)て国中(こくちゅう)に鳴る。蓋(けだ)し野田山(のだやま)の奥、深林幽暗の地たるに因れり。

ここに摩利支天を安置し、これに冊(かしず)く山伏の住(すま)える寺院を中心とせる、一落(いちらく)の山廓(さんかく)あり。戸数は三十有余にて、住民殆(ほとん)ど四五十なるが、いずれも俗塵(ぞくじん)を厭(いと)いて遯世(とんせい)したるが集りて、悠々閑日月を送るなり。

されば夜(よ)となく、昼となく、笛、太鼓、鼓などの、舞囃子(まいばやし)の音に和(か)して、謡(うたい)の声起り、深更時ならぬに琴、

琵琶など響微に、金沢の寝耳に達する事あり。

　一歳初夏の頃より、このあたりを徘徊せる、世にも忌わしき乞食僧あり、その何処より来りしやを知らず、忽然黒壁に住める人の眼界に顕れしが、殆ど湿地に蛆を生ずる如く、自然に湧き出でたるやの観ありき。乞食僧はその年紀三十四五なるべし。寸々に裂けたる鼠の法衣を結び合せ、繋ぎ懸けて、辛うじてこれを絡えり。

　容貌甚だ憔悴し、全身黒み痩せて、爪長く髯短し、ただこれのみならむには、一般乞食と変わらざれども、一度その鼻を見る時は、誰人といえども、造化の奇を

弄（ろう）するも、また甚だしきに、驚かざるを得ざるなり。鼻は大にして高く、しかも幅広に膨れたり。その尖（さき）は少しく曲（ゆが）み、赤く色着きて艶（つや）あり。鼻の筋通りたれば、額より口の辺（あたり）まで、顔は一面の鼻にして、痩せたる頬（ほお）は無きが如く、もし掌（たなそこ）を以て鼻を蔽（おお）えば、乞食僧の顔は隠れ去るなり。人ありて遠くより渠（かれ）を望む時は、鼻が杖（つえ）を突きて歩むが如し。

乞食僧は一条の杖を手にして、しばらくもこれを放つことなし。

杖は※（かぎのて）状[#「かぎかっこ、「、の左右反転」、137-5]の自然木（じねんぼく）なるが、その曲りたる処に鼻を凭（も）たせつ、手は

後様(うしろざま)に骨盤の辺(あたり)に組合せて、所作なき時は立ちながら憩いぬ。要するに吾人(ごじん)が腰掛けて憩うが如く、乞食僧にありては、杖が鼻の椅子(いす)なりけり。

奇絶なる鼻の持主は、乞丐(きっかい)の徒には相違なきも、強(あなが)ち人の憐愍(れんみん)を乞わず、かつて米銭の恵与を強いしことなし。喜捨する者あれば鷹揚(おうよう)に請取ること、あたかも上人が檀越(だんえつ)の布施を納むるが如き勿体(もったい)振りなり。

人もしその倨傲(きょごう)なるを憎みて、些(さ)の米銭を与えざらむか、乞食僧は敢(あえ)て意となさず、決してまた餓(う)えむともせず。

この黒壁には、夏候(かこう)一疋(ぴき)の蚊もなしと誇るまでに、

蝦蟇（がま）の多き処なるが、乞食僧は巧（たくみ）にこれを漁（あさ）りて引裂き啖（くら）うに、約（おおむ）ね一夕（いっせき）十数疋を以て足れりとせり。

されば乞食僧は、昼間何処（いずく）にか潜伏して、絶えて人に見（まみ）えず、黄昏（こうこん）蝦蟇の這出（はいい）づる頃を期して、飄然（ひょうぜん）と出現し、ここの軒下、かしこの塀際、垣根あたりの薄暗闇（うすくらやみ）に隠見しつつ、腹に充（み）たして後はまた何処（いずかた）へか消え去るなり。

二

ここに醜怪なる蝦蟇法師（がまほうし）と正反対して、玲瓏（れいろう）玉を欺

く妙齢の美人ありて、黒壁に住居（すまい）せり。渠（かれ）は清川お通とて、親も兄弟もあらぬ独身（ひとりみ）なるが、家を同じくする者とては、わずかに一人（にん）の老媼（おうな）あるのみ、これその婢（ひ）なり。

　お通は清川何某（なにがし）とて、五百石を領せし旧藩士の娘なるが、幼にして父を失い、去々年（おととし）また母を失い、全く孤独の身とはなり果てつ、知れる人の嫁入れ、婿娶（と）れと要らざる世話を懊悩（うるさ）く思いて、母の一周忌の終るとともに金沢の家を引払い、去年（こぞ）よりここに移りたるなり。もとより巨額の公債を有し、衣食に事欠かざれば、花車（かしゃ）風流に日を送りて、何の不足もあらざる身なるに、

月の如くその顔（かんばせ）は一片の雲に蔽（おお）われて晴るることなし。これ母親の死を悲（かなし）み別離（わかれ）に泣きし涙の今なお双頬（そうきょう）に懸（かか）れるを光陰の手も拭（ぬぐ）い去るあたわざるなりけり。

読書、弾琴、月雪花、それらのものは一つとして憂愁を癒（いや）すに足らず、転（うた）た懐旧の媒（なかだち）となりぬ。ただ野田山の墳墓を掃（はら）いて、母上と呼びながら土に縋（すが）りて泣き伏すをば、此上（こよな）き娯楽（たのしみ）として、お通は日課の如く参詣（さんけい）せり。

七月の十五日は殊に魂祭（たままつり）の当日なれば、夕涼（ゆうすずみ）より家を出でて独り彼処（かしこ）に赴きけり。

野田山に墓は多けれど詣来《もうでく》る者いと少なく墓守《も》る法師もあらざれば、雑草生茂《おいしげ》りて卒塔婆《そとば》倒れ断塚壊墳《だんちょうかいふん》［＃「壊墳」は底本では「懐墳」］算を乱して、満目転《うた》た荒涼たり。

いつも変らぬことながら、お通は追懐の涙を灌《そそ》ぎ、花を手向けて香を燻《くん》じ、いますが如く斉眉《かしず》きて一時余《いっときあまり》も物語りて、帰宅の道は暗うなりぬ。

急足《いそぎあし》に黒壁さして立戻る、十間《けん》ばかり間《あい》を置きて、背後《うしろ》よりぬき足さし足、密《ひそか》に歩を運ぶはかの乞食僧なり。渠《かれ》がお通のあとを追うは殆《ほとん》ど旬日前《じゅんじつぜん》よりにして、美人が外出をなすに逢《お》うては、影の形に添う如く

絶えずそこここ附絡（つきまと）うを、お通は知らねど見たる者あり。この夕（ゆうべ）もまた美人をその家まで送り届けし後、杉の根の外（おもて）に佇（たたず）みて、例の如く鼻に杖（つえ）をつきて休らいたり。

時に一縷（いちる）の暗香（あんこう）ありて、垣の内より洩（も）れけるにぞ法師は鼻を蠢（うご）めかして、密に裡（うち）を差覗（さしのぞ）けば、美人は行水を使いしやらむ、浴衣涼しく引絡（ひきまと）い、人目のあらぬ処なれば、巻帯姿（まきおびすがた）繕わで端居（はしい）したる、胸のあたりの真白きに腰の紅（くれない）照添いて、眩（まばゆ）きばかり美（うる）わしきを、蝦蟇法師は左瞻右視（とみこうみ）、或（あるい）は手を掉（ふ）り、足を爪立（つまだ）て、操人形が動くが如き奇異なる身振（みぶり）をしたりとせよ、何思いけ

む踵（くびす）を返し、更に迂回（うかい）して柴折戸（しおりど）のある方（かた）に行（ゆ）き、言葉より先に笑懸けて、「暖き飯一膳（ぜん）与えたまえ、」と巨（おお）いなる鼻を庭前（にわさき）へ差出しぬ。

　未（いま）だ乞食僧を知らざる者の、かかる時不意にこの鼻に出会いなば少なくとも絶叫すべし、美人はすでに渠（かれ）を知れり。且つその狂か、痴（ち）か、いずれ常識無き阿房（あほう）なるを聞きたれば、驚ける気色も無くて、行水に乱鬢（みだれびん）の毛を鏡に対して撫附（なでつ）けいたりけり。

　蝦蟇法師はためつすがめつ、さも審（いぶ）かしげに鼻を傾けお通が為（な）せる業（わざ）を視（なが）めたるが、おかしげなる声を発し、「それは」と美人の手にしたる鏡を指して尋ねたり。

妙なることを聞く者よとお通はわずかに見返りて、「鏡」とばかり答えたり。阿房はなおも推返(おしかえ)して、「何(なん)の用にするぞ」と問いぬ。「姿を映して見るものなり、御僧(おんそう)も鼻を映して見たまえかし。」といいさま鏡を差向けつ。蝦蟇法師は飛退(とびすさ)りて、さも恐れたる風情にて鼻を飛ばして遁去(にげさ)りける。

　これを語り次ぎ伝え聞きて黒壁の人々は明(あきら)かに蝦蟇法師の価値を解したり。なお且つ、渠等(かれら)は乞食僧のお通に対して馬鹿々々しき思いを運ぶを知りたれば、いよいよその阿房なることを確めぬ。

　さりながら鏡を示されし時乞食僧は逃げ去りつつ人

知れず左記の数言を呟きたり。
「予は自ら誓えり、世を終るまで鏡を見じと、然り断じて鏡を見まじ。否これを見ざるのみならず、今思出したる鏡という品の名さえ、務めて忘れねばならぬなり。」

三

蝦蟇法師がお通に意あるが如き素振を認めたる連中は、これをお通が召使の老媼に語りて、且つ戯れ、且つ戒めぬ。

毎夕納涼台(すずみだい)に集る輩(やから)は、喋々(ちょうちょう)しく蝦蟇法師の噂(うわさ)をなして、何者にまれ乞食僧の昼間の住家を探り出だして、その来歴を発出(みいだ)さむ者には、賭物(かけもの)として金(きん)一円を抛(なげう)たむと言いあえりき、一夕(いっせき)お通は例の如く野田山に墓参して、家に帰れば日は暮れつ。火を点じて後、窓を展(ひら)きて屋外の蓮池(れんち)を背(せな)にし、涼を取りつつ机に向(むか)いて、亡き母の供養のために法華経(ほけきょう)ぞ写したる。その傍(かたわら)に老媼ありて、頻(しき)りに針を運ばせつ。時にかの蝦蟇法師は、どこを徘徊(はいかい)したりけむ、ふと今ここに来(きた)れるが、早くもお通の姿を見て、眼(まなこ)を細め舌なめずりし、恍惚(こうこつ)たるもの久しかりし、乞食僧は美人臭しとでも思

えるやらむ、むくむく鼻を蠢かし漸次に顔を近附けたる、面が格子を覗くとともに、鼻は遠慮なく内へ入りて、お通の頬を掠めむとせり。

珍客に驚きて、お通はあれと身を退きしが、事の余りに滑稽なるにぞ、老婆も叱言いう遑なく、同時に吻々と吹き出しける。

蝦蟇法師は悞りて、歓心を購えりとや思いけむ、悦気満面に満ち溢れて、うな、うな、と笑いつつ、頻りにものを言い懸けたり。

お通はかねて忌嫌える鼻がものいうことなれば、冷然として見も返らず。老媼は更に取合ねど、鼻はなお

もずうずうしく、役にも立たぬことばかり句切もなさで饒舌散らす。その懊悩さに堪えざれば、手を以て去れと命ずれど、いっかな鼻は引込まさぬより、老媼はじれてやっきとなり、手にしたる針の尖を鼻の天窓に突立てぬ。

あわれ乞食僧は留を刺されて、「痛し。」と身体を反返り、涎をなすりて逸物を撫廻し撫廻し、ほうほうの体にて遁出しつ。走り去ること一町ばかり、俄然留り振返り、蓮池を一つ隔てたる、燈火の影を屹と見し、眼の色はただならで、怨毒を以て満たされたり。その時乞食僧は杖を掉上げ、「手段のいかんをさえ問

わざれば何の望か達せざらむ。」

かくは断乎として言放ち、大地をひしと打敲きつ、首を縮め、杖をつき、徐ろに歩を回らしける。

その背後より抜足差足、密に後をつけて行く一人の老媼あり。これかのお通の召使が、未だ何人も知り得ざる蝦蟇法師の居所を探りて、納涼台が賭物したる、若干の金子を得むと、お通の制むるをも肯かずして、そこに追及したりしなり。呼吸を殺して従い行くに、阿房はさりとも知らざる状にて、殆ど足を曳摺る如く杖に縋りて歩行み行けり。

人里を出離れつ。北の方角に進むことおよそ二町ば

かりにて、山尽きて、谷となる。ここ嶮峻（けんしゅん）なる絶壁にて、勾配（こうばい）の急なることあたかも一帯の壁に似たり、松杉を以て点綴（てんてつ）せる山間の谷なれば、緑樹長（とこしえ）に陰をなして、草木が漆黒の色を呈するより、黒壁とは名附くるにて、この半腹の洞穴（どうけつ）にこそかの摩利支天は祀（まつ）られたれ。

　遥（はる）かに瞰下（みおろ）す幽谷は、白日闇（はくじつあん）の別境にて、夜昼なしに靄（もや）を籠（こ）め、脚下に雨のそぼ降る如く、渓流暗に魔言を説きて、啾々（しゅうしゅう）たる鬼気人を襲う、その物凄（ものすご）さ謂（い）わむ方なし。

　まさかこことは想わざりし、老媼は恐怖の念に堪え

ず、魑魅魍魎(ちみもうりょう)隊をなして、前途に塞(ふさが)るとも覚しきに、慾(よく)にも一歩を移し得で、あわれ立竦(たちすくみ)になりける時、二点の蛍光此方(こなた)を見向き、一喝して、「何者ぞ。」掉冠(ふりかむ)れる蝦蟇法師の杖の下(もと)に老媼は阿呀(あわや)と蹲踞(うずくま)りぬ。

　蝦蟇法師は流眄(しりめ)に懸け、「へ、へ、へ、うむ正に此奴(こやつ)なり、予が顔を傷附けたる、大胆者、讐返(しかえし)ということのあるを知らずして」傲然(ごうぜん)としてせせら笑う。

　これを聞くより老媼はぞっと心臓まで寒くなりて、全体氷柱(つらら)に化したる如く、いと哀れなる声を発して、「命ばかりはお助けあれ。」とがたがた震えていたりける。

四

さるほどに蝦蟇法師（がまほうし）はあくまで老媼（おうな）の胆（きも）を奪いて、「コヤ老媼、汝（なんじ）の主婦を媒妁（なかだち）して我（わが）執念を晴らさせよ。もし犠牲（いけにえ）を捧げざれば、お通はもとより汝もあまり好（よ）きことはなかるべきなり、忘れてもとりもつべし。それまで命を預け置かむ、命冥加（いのちみょうが）な老耄（おいぼれ）めが。」と荒（あら）かに言棄（いいす）てて、疾風土を捲（ま）いて起ると覚しく、恐る恐る首（こうべ）を擡（もた）げあぐれば、蝦蟇法師は身を以て隕（おと）すが如く下（くだ）り行（ゆ）き、靄（もや）に隠れて失（う）せたりけり。

やれやれ生命（いのち）を拾いたりと、真蒼（まっさお）になりて遁帰（にげかえ）れば、冷たくなれる納台（すずみだい）にまだ二三人居残りたるが、老媼の姿を見るよりも、「探検し来りしよな、蝦蟇法師の住居（すまい）は何処（いずこ）。」と右左より争い問われて、答うる声も震えながら、「何がなし一件じゃや、これなりこれなり。」と、握拳（にぎりこぶし）を鼻の上にぞ重（かさね）たる、乞食僧の人物や、これを痴（ち）と言（いわ）むよりはたまた狂と言むより、もっとも魔たるに適するなり。もししからずば少なくとも魔法使に適するなり。

かかりし後法師の鼻は甚だ威勢あるものとなりて、暗裡（あんり）人をして恐れしめ、自然黒壁を支配せり。こは一

般に老若（ろうにゃく）が太（いた）く魔僧を忌憚（いみはばか）かり、敬して遠ざからむと勤めしよりなり、誰（たれ）か妖星（ようせい）の天に帰して、眼界を去らむことを望まざるべき。

　ここに最もそのしからむことを望む者は、蝦蟇と、清川お通となり。いかんとなればあまたの人の嫌悪に堪えざる乞食僧の、黒壁に出没するは、蝦蟇とお通のあるためなりと納涼台（すずみだい）にて語り合えるを美人はふと聞噛（ききかじ）りしことあればなり、思うてここに到る毎（ごと）に、お通は執心の恐しさに、「母上、母上」と亡母を念じて、己（おの）が身辺に絡纏（まつわ）りつつある淫魔（いんま）を却（しりぞ）けられむことを哀願しき。お通の心は世に亡き母の今もその身ととも

に在して、幼少のみぎりにおけるが如くその心願を母に請えば、必ず肯かるべしと信ずるなり。

さりながらいかにせむ、お通は遂に乞食僧の犠牲にならざるべからざる由老媼の口より宣告されぬ。

前日、黒壁に賁臨せる蝦蟇法師への貢として、この美人を捧げざれば、到底好き事はあらざるべしと、恫喝的に乞食僧より、最も渠を信仰してその魔法使たるを疑わざる件の老媼に媒妁すべく言込みしを、老媼もお通に言出しかねて一日免れに猶予しが、厳しく乞食僧に催促されて、謂わで果つべきことならねば、止むことを得で取次たるなり。しかるにお通は予め

その趣を心得たれば、老媼が推測りしほどには驚かざりき。

美人は冷然として老媼を諭しぬ、「母上の世に在(いま)さば何とこれを裁きたまわむ、まずそれを思い見よ、必ずかかる乞食の妻となれとはいいたまわじ。」と謂われて返さむ言(ことば)も無ければ、老媼は甚だしき迷信者(じゃ)なれば乞食僧の恐喝(きょうかつ)を真(まこと)とするにぞ、生命(いのち)に関わる大事と思いて、「彼奴(かやつ)は神通広大(じんずうこうだい)なる魔法使にて候えば、何を仕出(しい)ださむも料(はか)り難(がた)し。さりとて鼻に従いたまえと私(わたくし)申上げはなさねども、よき御分別もおわさぬか。」と熱心に云えば冷(ひやや)かに、「いや、分別も何もなし、

たといいかなることありとも、母上の御心に合わぬ事は誓ってせまじ。」

と手強き謝絶に取附く島なく、老媼は太く困じ果てしが、何思いけむ小膝を拍ち、「すべて一心固りたるほど、強く恐しき者はなきが、鼻が難題を免れむには、こっちよりもそれ相当の難題を吹込みて、これだけのことをしさえすれば、それだけの望に応ずべしとこういう風に談ずるが第一手段に候なり、昔語にさること侍りき、ここに一条の蛇ありて、とある武士の妻に懸想なし、頑にしょうじ着きて離るべくもなかりしを、その夫何某智慧ある人にて、欺きて蛇に約し、

汝巨鷲(なんじおおわし)の頭三個(みっつ)を得て、それを我に渡しなば、妻をやらむとこたえしに、蛇はこれを諾(うべな)いて鷲と戦い亡失(ほろびう)せしということの候なり。されど今慭(なまじい)に鷲の首などと謂(い)う時は、かの恐しき魔法使の整え来ぬとも料(はか)り難く因りて婆々(ばば)が思案には、（其方(そなた)の言分承知したれど、親の許(ゆるし)のなくてはならず、母上だに引承(ひきうけ)たまわば何時(なんどき)にても妻とならん、去ってまず母上に請来(こいきた)れ）と、かように貴娘(あなた)が仰せられし、と私(わたくし)より申さむか、何がさて母君は疾(とく)に世に亡き御方(おんかた)なれば、出来ぬ相談と申すもの、とても出来ない相談の出来よう筈(はず)のなきことゆえ、いかなる鼻もこれには弱りて、しまいに泣寝

入となるは必定（ひつじょう）、ナニ御心配なされまするな、」と説く処の道理（もっとも）なるに、お通もうかと頷（うなず）きぬ。かくて老媼がこのよしを蝦蟇法師に伝えて後、鼻は黒壁に見えずなれり。

さては旨（うま）いぞシテ操（や）ったり、とお通にはもとより納涼台（すずみだい）にも老媼は智慧を誇りけるが、奚（いずく）んぞ知らむ黒壁に消えし蝦蟇法師の、野田山の墓地に顕（あらわ）れて、お通が母の墳墓の前に結跏趺坐（けっかふざ）してあらむとは。

その夕（ゆうべ）もまたそこに詣（もう）でし、お通は一目見て蒼（あお）くなりぬ。

明治三十五（一九〇二）年一月

底本：「泉鏡花集成４」ちくま文庫、筑摩書房
　　１９９５（平成７）年10月24日第1刷発行
底本の親本：「鏡花全集　第七巻」岩波書店
　　１９４２（昭和17）年7月22日第1刷発行
※疑問点の確認に当たっては、底本の親本を参照しました。
入力：門田裕志
校正：今井忠夫
２００３年8月31日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。